

秋 五 首

英法一 鹽 谷 安 喜

木の葉散るさみちは暗し草かげにちさき蛇出て我に抵抗へり
黒き土踏みつけてゆく畑中の麥の小粒に生はありけり
沈黙の眞晝の光漲れる疊の上に蠅の舞ふ哉
野を行けば大いなる哉鳶の輪のめぐる下には高き木もなし
登る日の影うらかに今日しもぞ民彌仰ぐ日嗣立ちまして

(十一月三日立太子禮奉祝歌)

郷に病みて

一、二、丙 春

瞳

病床に秋海棠の葉の凋み見つめてあれば涙垂り來も
午さがりふとまごろみゆ覺ぬれば庭の柘榴のホと落つる音
病室の障子開かせしんみりとコスモスの花に見入るわれはも
かそけくも庭の落葉を掃く音の聞ゆるもよし病床にして
友はいまだイツの晝なご習ひ居らむ病む兒は秋の陽を浴びて居り
はりかへし障子明るく秋風の外の面を行くも心地よや朝